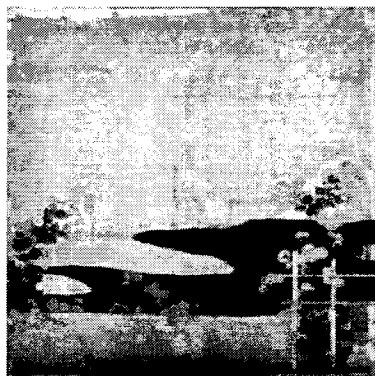
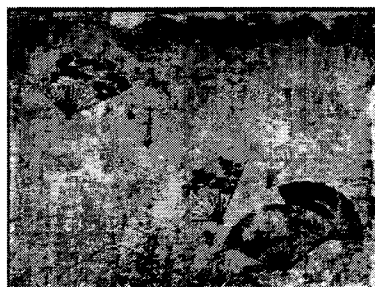


二条城の障壁画

現在、京都にある元離宮二条城の「展示・収蔵館」において、築城400年を記念して「菊と扇の協奏曲（コンチェルト）展」と題した公開展示をしています。本格修理完了後、初公開となる黒書院四の間の障壁画であります（平成22年8月31日まで公開）。国宝二の丸御殿には、車寄側から、遠侍・式台・大広間・蘇鉄の間・黒書院・白書院が雁行型に連なっています。その中でも、黒書院には4つの主要な部屋がありますが、いずれも四季折々の花や鳥が華やかに配置され、長押の上下では異なる絵を描くという特徴を有しています。四の間の障壁画の場合は、上には「扇とススキ」が、下には「菊花」があります。これらの障壁画（襖貼付）の構造は、絵師が完成させた絵「本紙」に、表具師が1～2枚の紙を裏打ちします。一方、下地となる骨木地にも何層かの紙を下貼りしていきます。そして、その両者を貼り合わせ、最後に縁と引き手をつけて「襖貼付」が完成するというのです。



さて、長年の間に、本紙の絵具が剥がれたり、亀裂や破れが生じたりし、障壁画は傷みますが、それを修理する工程は以下の通りです。ここで、私が最も興味を持ったのは、「表打ち」の存在とその位置づけでした。障壁画を裏側で支えている土台・基礎を新たに固め直して復元するには、その工程の初期段階で「表打ち」しなければならないということなのです。この事実は、人間関係を豊かにしていくための「羅針盤」とも言える、大変示唆に富んだものでありましょう。

【 障壁画の修理工程 】

- ①解体する
- ②表打ちする
- ③裏打ち紙をすべて除去する
- ④欠損箇所の紙を取り替える
- ⑤新しい裏打ち紙を貼る
- ⑥下地を新調する
- ⑦新しい下地に貼り込む
- ⑧新しい縁を取り付ける

すなわち、人間関係の「裏打ち」としての“心の繋がりがり・絆”がほつれてしまっていて、新しく裏打ちし直さなければならない時は、迷わず「表打ち」作業、つまり人間関係の表面的な型・形・枠組に心を砕いてみてほしいということです。

例えば、人間関係の潤滑油や鍵とも言うべき「あいさつ」「助け合い」などを取りあげても分かる通り、行動の「裏打ち」作業であるところの“その意味や意義の深い感得・理解、相手との交流・触れ合い”を経

た上で実際の行動に結実させるといのが、普く通ずる関係深化の道筋でしょう。しかし、心ならずも「裏打ち」した部分を修復しなければならない時や新たな人間関係を築いていこうとする時には、「表打ち」作業としての“形式や型”から入り、人間関係の表層をしっか

りと固め定着させるようなアプローチがあっても良いということです。「あいさつ」や「助け合い」の清々しさや素晴らしさを理解していなくとも、とにかくその形や手法をまねて表現・活動してみるわけです。それに伴って、相互の心田は耕され、温かな人間関係の芽が自然と育まれ、徐々に強く豊かな人間関係の架け橋が創生されていくのではないのでしょうか。

人生において最も不思議に満ち溢れている人間同士の「出会いと関係」においてさえ、障壁画にみる「裏打ち」と「表打ち」作業に通ずるものがあつたのです。目を凝らし、耳を澄ましさえすれば、案外、今回の話を敷衍して応用できる場面は、日々の生活の他の場面にも、たくさん潜んでいるかも知れません。この夏休み、一度、そんな切り口から熟慮してみるのも意味があることでしょう。

～3年生の授業より～ 「卒業文集最後の二行」

7月8日、3年生の授業では、「卒業文集最後の二行」を学習しました。中学3年生のT子は、はやくして母親を亡くし、二人の弟の面倒を見ていて、家計も苦しかった彼女は、身なりがみすばらしいが故に、いじめられたのです。T子の卒業文集最後の二行には、「私が今一番ほしいのは母でもなく、本当のお友達です。そして、きれいなお洋服です。」と書かれていたのです。この最後の2行に込められたT子の思いを読み取った感想を紹介します。

- ・筆者は、T子さんを傷つけた結果、自分も傷つくことになった。あらためていじめは何もいいことが無く、いじめる側もいじめられる側も、いやな思いをするのだと思った。人を見かけや性格だけで判断してけなすのは、人として最低だと思う。一人一人違う個性を持っているのはあたりまえだから、そこを理解していかなければならないと思う。それを多くの人がわかって行動していったら、いじめはきっと起こらなくなるはず。
- ・いじめについての学習は小学校の時からやっているし、私自身いじめにあったことがあるので、いじめについては毎回深く考えるのですが、今日読んだ話は、一段と身近に感じられ、とても重いものでした。私は、汚いとかくさいとか、そういうものではなく、名字がいじりやすいのか、こじつけのように聞こえるいやなあだ名をつけられました。それは、この話のT子さんの気持ちと違うようでも少し似ていて、T子さんの気持ちは考えやすかったし、とてもつらかったということが簡単に想像できて、とても悲しかったらうと思いました。しかも、家では母親代わりでしっかりしていなければいけなくて、すごくかわいそうだと思いました。これで、いじめていた筆者が、あとになって罪悪感を全く感じていなかったら、T子さんが報われないし、筆者もろくでもない人間になっていたでしょうね。すごく悲しい話だけど、同時にすごくよい話とも思いました。
- ・いじめは本当に何気なくいった言葉や何も考えずに行ったことから始まってしまうとわかりました。私はいじめたことはないと自分では思っていますが、きっと何気なく誰かを傷つけてしまっていたのではないかとということに気付きました。いじめられた記憶は消えてはくれませんが、いじめた方の人にもたくさんの面があつて、あの時いじめてきたから、あの人はいやだとは、私は思いません。生きていくなかで、たくさんの人を傷つけ、傷つくことがあると思いますが、出来るだけ相手のことを深く考え、よい面悪い面をすべて受け入れることが出来たら、きっといじめはなくなるはずです。